

次期「熊本市生物多様性戦略」 骨子（案）について

環境局 環境推進部 環境政策課

1-1 熊本市生物多様性戦略（くまもとCプラン）

【熊本市生物多様性戦略（くまもとCプラン）】

生物多様性基本法第13条に基づき平成28年（2016年）に策定した生物多様性地域戦略。

5つの基本戦略（知る、学び・つながる、守る、創る、活かす）を軸に取組を行ってきた。

【改定の背景】

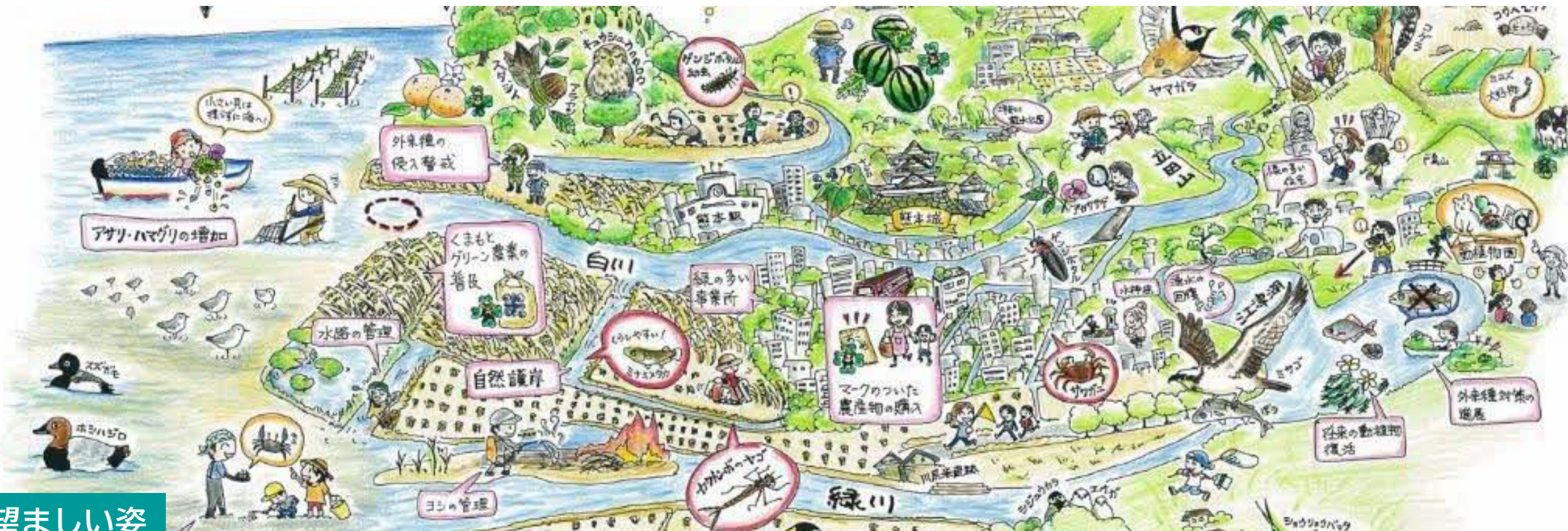
①2010年に開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）では、**2050年までのビジョン「自然と共生する社会」**を掲げた愛知目標が採択され、これまで取り組まれてきた。**しかし、過去50年間で自然変化を引き起こす要因が加速する中、**世界的に劣化した自然や生態系サービスを回復していくため、2022年のCOP15において、2030年までの目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択された。

②国においても新たな世界目標に対応するため、**「生物多様性国家戦略2023-2030」**が2023年3月末に閣議決定された。

③そこで、本市の生物多様性地域戦略を改定し、従来のような自然保護に特化した取組だけでなく、新たな目標に向けた取組について多くの主体を巻き込みながら、**私たちの暮らしの基盤となる「生物多様性」の保全**に取り組んでいく。

1-2 くまもとCプラン（2016-2023）

基本理念 「自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとを、みんなで実現する」



【2050年をイメージし長期的な視点から熊本市が目指す姿】

市民一人ひとりが関心を持ち、理解し、暮らしの中で生物多様性を上手に利用しながら守る行動をしている姿、市内に水や緑のつながりが身近な自然とともにかたちづくられ、豊かな生きものが息づき、人と人、人と自然がつながりあい、いきいきとした暮らしが営まれている

1-3 くまもとCプラン(検証)

基本戦略1 ～知る～

基盤となる情報の継続的な収集・整備

(2023年) 短期目標

- 自然環境に関する情報が収集・整理され、関係者がアクセスすることができる環境が整っている。

検証と課題

- 希少種や外来生物などの情報収集・整理を行い、情報発信の核となる体制や情報発信サイトを構築したが、絶滅危惧種の情報収集については今後、更に行っていく必要がある。
- 未来に残したい自然環境のほか、環境の豊かさの指標となる種(指標種)の選定を行ったが、すべての指標種のモニタリングには至っていないため、モニタリングをさらに進める必要がある。

(参考) 主な実績

- 自然環境に関する情報発信の核となる4課連携プロジェクト（熊本博物館、動植物園、環境総合センター、環境政策課）を設置
- 熊本市HPに「熊本市の環境」ページを構築したほか、動植物園内に生物多様性情報コーナー設置
- 指標種の一つであるセミ調査や、市民活動団体による環境省主催の「モニタリングサイト1000調査」の実施

1-4 くまもとCプラン(検証)

基本戦略2 ～学び・つながる～

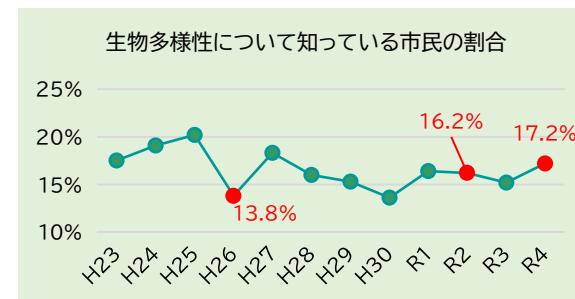
生物多様性の認識の向上、人材の育成、
連携・協働体制の構築

(2023年) 短期目標

- 生物多様性について、認知度が高まり、生物多様性や自然体験に関するイベントへの参加者が増加している。
- 生物多様性について知っている市民の割合 H26年:13.8% → R2年:25.0% (期間延長後 R5年:25.0%)
【目標値】

検証と課題

- 生物多様性の言葉の認知度は依然と低い状況であるため、認知度向上に向けた取組が必要である。(R2年:16.2%、R4年:17.2%)
- 熊本地震や新型コロナウイルスの影響で、イベントなどの普及啓発が十分に開催できなかったため、イベント等の再開の他、SNS等を活用した取組を進める必要がある。
- 市民活動団体のつながりの場である「いきもんネット」を構築したが、団体同士の連携推進など効果的に活用するための工夫が必要である。



(参考) 主な実績

- 生物多様性副読本「いきものさがし」の作成
- 生物多様性の日のイベント「いきものフェア」の開催 (毎年5月開催)
- 「いきもんネット」の構築 (R5.7月現在、17団体登録)

1-5 くまもとCプラン(検証)

基本戦略3 ～守る～

生物の生息・生育地の保全

(2023年) 短期目標

- 絶滅危惧種の保全や生きものの生息・生育環境の保全、外来種対策等について、緊急的な取組が実施されている。
- 効果的な対策の手法についての検討が進んでいる。
- 広域的な視点での具体的な取組が実施されている。

検証と課題

- 絶滅危惧種の保全として動植物園で生息域外保全を行ったほか、生きものの生息・生育環境の保全として水前寺江津湖の公園管理や保全活動を行っているが、他の場所においても実施する必要がある。
- 江津湖の外来魚やアライグマ、オオキンケイギクなどの特定外来生物の駆除を行っているが、根絶には至っていないため、より効果的な手法の検討が必要である。
- 近隣4市町と連携したアライグマ防除、白川中流域における湛水事業、熊本連携中枢都市圏における温暖化対策等を実施したが、今後も継続して取り組んでいく必要がある。

(参考) 主な実績

- 動植物園におけるニホンイヌワシやトサミズサンショウウオの生息域外保全
- 水前寺江津湖公園利活用・保全計画に基づく公園管理や保全活動
- 近隣4市町（宇土市、宇城市、玉東町、熊本市）と連携したアライグマ防除
- 水源かん養林の整備や、湛水事業の実施

1-6 くまもとCプラン(検証)

基本戦略4 ～創る～

生物の生息・生育地（拠点）の創出、
生態系ネットワークの向上

（2023年）
短期目標

- 生きものの生息・生育地の創出にも寄与する緑化の取組が行われている。
- 効果的な緑地の創出・ネットワーク形成手法や整備・管理手法が検討されている。
- 生物多様性に配慮した整備が増加している。

検証と課題

- 緑化に関する様々な助成の実施など「熊本市緑の基本計画」に基づく取組を行ってきたが、「生きものの生息・生育地の創出」という視点での取組を進める必要がある。
- 魚巢ブロックを使用した河川改修を実施したが、このような生物多様性に配慮した整備を今後更に促進していく必要がある。

（参考）主な実績

- 宅地や事業所の緑化助成
- 森林の間伐の実施（Eco-DRR（生態系を活用した防災・減災）の視点の推進）
- 鶯川（うぐいすがわ）における環境に配慮した河川改修

1-7 くまもとCプラン(検証)

基本戦略5 ～活かす～

めぐみの持続可能な利用

(2023年) 短期目標

- 「水」や「歴史・文化」の視点と連携し、生物多様性が地域資源であることが認識され、地域の魅力が発掘され、活用する取組が実施されている。

検証と課題

- 「アジア・太平洋水サミット」等を開催し、本市の地下水の取組を国内外に発信したが、今後も継続して情報発信していく必要がある。
- 地下水・農水産物等については情報発信を行っているが、これらの地域資源は生物多様性のめぐみによるものと認識してもらえるような取組が必要である。

(参考) 主な実績

- 「アジア・太平洋水サミット」やアフターイベント、水検定、地産地消イベント等を通じた魅力発信
- 緑化フェアでの木製遊具における県産木材の活用

(参考) LINE市民アンケート【抜粋】

調査対象・期間 LINE市民アンケート（709名回答）・令和5年6月21日～7月4日

- ①「言葉の意味を知っている」割合は34%と依然として認知度が低い状況。年代別では20歳代の認知度が一番高かった。
- ②多くの方が生物多様性に配慮した行動に取り組んでいる。
- ③本市が実施している取組やいきもんネットの認知度は、依然として低い。

【問1】「生物多様性」とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことで、私たちが自然から受ける様々な恵みの基盤のことですが、知っていましたか。

◆結果1	「言葉の意味を知っている」	34.0%
	「聞いたこともなかった」	26.2%
	「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」	20.2%

【問2】熊本市の身近な自然はどこですか。（複数回答）

◆結果2	「水前寺・江津湖」	31.1%
	「白川・緑川」	19.7%
	「立田山」	17.8%

【問3】問2の場所は以前と比べどのような変化があったと感じますか。

◆結果3	「どちらかといえば劣化したと感じる」	27.4%
	「変化はない」	25.7%
	「分からない」	17.1%

【問6】生物多様性に配慮した行動として、次にあげるものの中で、既に取り組んでいることはありますか。（複数選択）

◆結果6	「マイバッグ・ボトルを利用しプラスチックごみ削減」	21.3%
	「食べ残しをしないなど食品ロスを減らす」	19.9%
	「地元で採れた食材を食べる」	16.7%

【問7】熊本市の生きものや自然を守っていくため活動している団体について、知っている団体「全て」にチェック。

◆結果7	「再春館「一本の木」財団」	18.3%
	「立田山野外保育センター（雑草の森）」	12.4%
	「立田山自然探検隊」	11.7%

【問8】熊本市が実施している、生物多様性保全のための取組について、知っているものを「全て」選んでください。

◆結果8	「どの取組も知らない」	44.0%
	「江津湖地域の特定外来生物等による被害の防止」	22.9%
	「市民参加型セミ調査」	10.9%

（考察）市民の環境への関心は高いものと推察されるが、本市の取組や活動団体について知らないと回答した割合も高く、今後、更なる周知啓発や活動団体との連携などに取り組んでいく必要がある。

(参考) 必由館高校アンケート【抜粋】

調査対象・期間 必由館高校1・2年生（645名回答） 6月26日～6月30日

- ①言葉自体を知っている割合は約9割と高いが、意味を知っている割合は24%と低かった。
- ②多くの生徒が生物多様性に配慮した行動に取り組んでいる。
- ③本市が実施している取組やいきもんネットの認知度は一般市民アンケートに比べ特に低かった。

【問1】「生物多様性」とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことで、私たちが自然から受ける様々な恵みの基盤のことですが、知っていましたか。

◆結果1	「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」	41.7%
	「言葉の意味を知っている」	24.0%
	「言葉は聞いたことがあるが意味がよく分からない」	21.9%

【問2】熊本市の身近な自然はどこですか。（複数回答）

◆結果2	「金峰山」	26.8%
	「白川・緑川」	23.3%
	「水前寺・江津湖」	18.4%

【問3】問2の場所は以前と比べどのような変化があったと感じますか。

◆結果3	「変化はない」	43.2%
	「分からない」	29.4%
	「どちらかといえば豊かになったと感じる」	9.8%

【問6】生物多様性に配慮した行動として、次にあげるものの中で、既に取り組んでいることはありますか。（複数選択）

◆結果6	「食べ残しをしないなど食品ロスを減らす」	25.1%
	「マイバッグ・ボトルを利用しプラスチックごみ削減」	22.1%
	「節電や自然エネルギー由来の電気を利用している」	14.4%

【問7】熊本市の生きものや自然を守っていくため活動している団体について、知っている団体「全て」にチェック。

◆結果7	「どの団体も知らない」	39.5%
	「再春館「一本の木」財団」	12.8%
	「NPO法人くまもと未来ネット」	11.4%

【問8】熊本市が実施している、生物多様性保全のための取組について、知っているものを「全て」選んでください。

◆結果8	「どの取組も知らない」	75.6%
	「いきものフェア」	7.6%
	「生物多様性副読本「いきものさがし」	4.4%

(考察) 「生物多様性」の意味を知っている割合は一般市民アンケート結果より低く、本市の取組やいきもんネットの活動団体の認知度も同様であったことから、若い世代へ向けた周知啓発方法を工夫し、取り組んでいく必要がある。

1-8 くまもとCプラン(振り返り)

現行戦略について

- 希少種、外来生物、指標種のほか、未来に残したい自然環境などの情報収集・整理は行ってきたが、絶滅危惧種の情報収集や自然環境に関するモニタリングなど、さらに継続して実施する必要がある。
- 生物多様性の認識の向上に向け、周知啓発を工夫していく必要がある。
- 絶滅危惧種の保全、外来生物の駆除、緑地の創出などは一部地域にとどまるため、引き続き「生物の生息・生育地の保全や拠点の創出」について取り組んでいく必要がある。
- 地域の魅力である「水」や「農水産物」を活用した情報発信は行ってきたが、これらの地域資源は生物多様性のめぐみであるという認識を定着させるとともに、歴史や文化についても地域資源であるという認識のもと地域づくりや観光産業に取り組んでいく必要がある。



生物多様性の保全は長期的な施策展開が求められることから、次期戦略においても現行戦略を踏襲することで、過去の実績や成果を継続し連続性を確保する。

2-1 次期戦略の基本方針①

昆明・モントリオール生物多様性枠組～2030年ミッション～ ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現

昆明・モントリオール生物多様性枠組
2050年ビジョン

自然と共生する世界
(a world of living in harmony with nature)

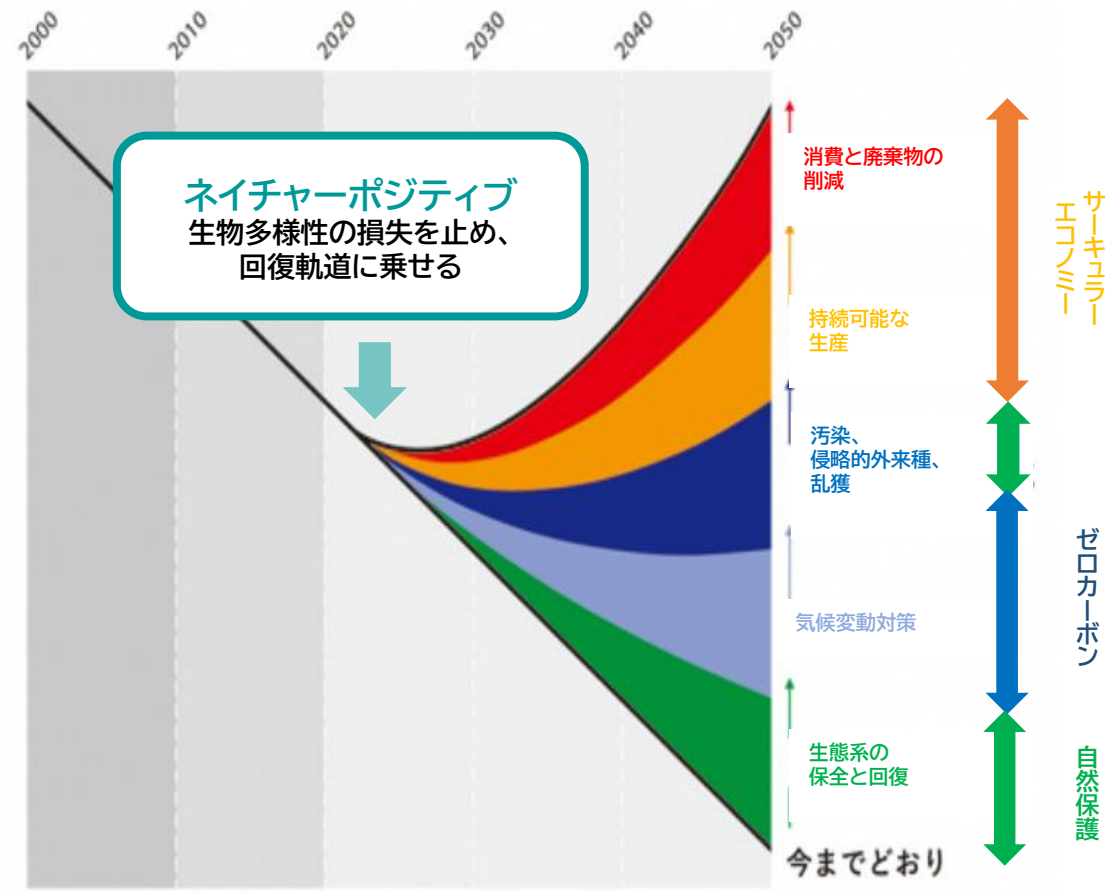
愛知目標から引き継いだ長期目標であり、
我が国で培われた知恵と伝統に基づく考え方



2030年ミッション

**自然を回復軌道に乗せるために
生物多様性の損失を止め、
反転させるための緊急の行動をとる**

資料:環境省次期生物多様性国家戦略地方説明会より



これまでどおりの取組では生物多様性は損失し続けるため、自然環境保全の取組だけでなく、様々な分野が連携して取り組んでいくことで、生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せていく必要がある。

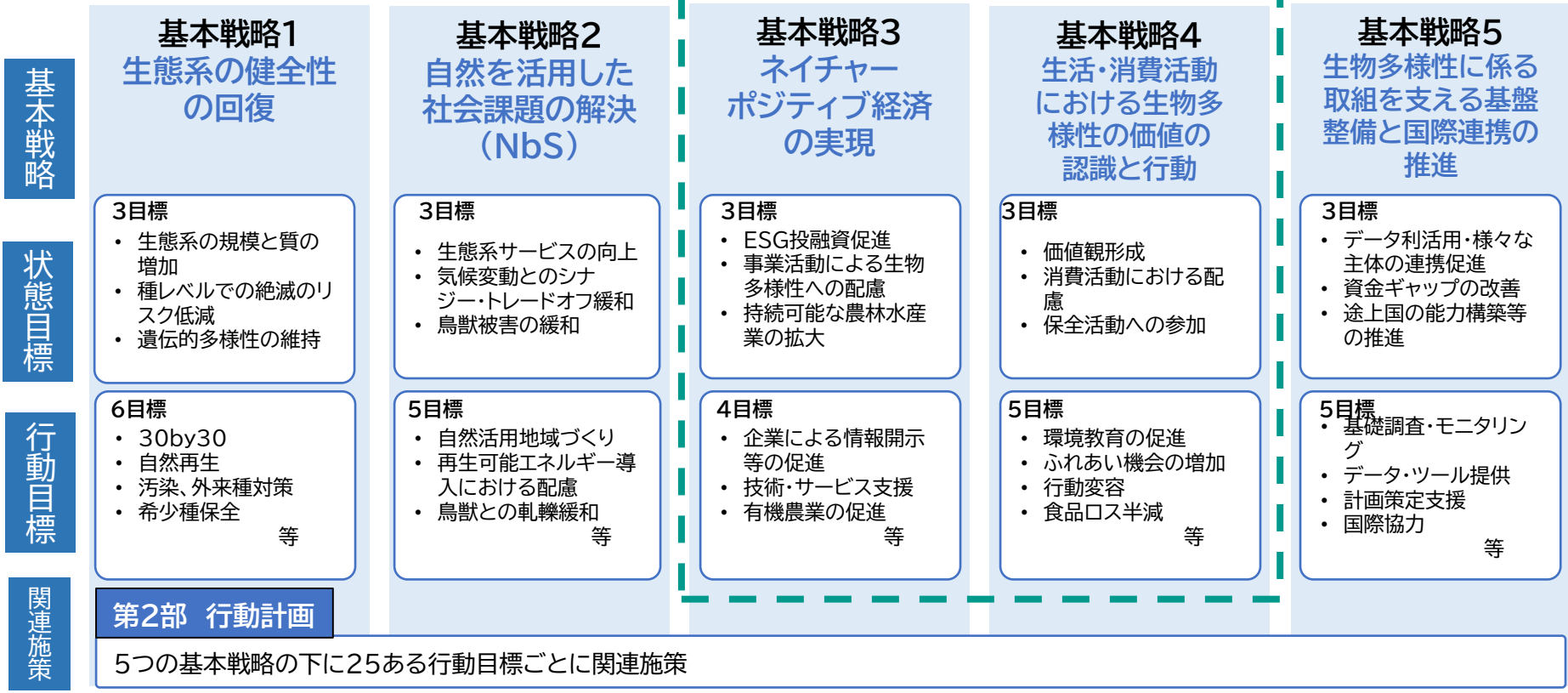
2-2 次期戦略の基本方針②

【生物多様性国家戦略(2023-2030)】新たな世界目標の実現に向け、地球の持続可能性の土台であり人間の安全保障の根幹である生物多様性・自然資本を守り活用するための戦略として、生物多様性の損失と気候危機の総合的対応のほか、社会の根本的変革、自然資本を守り活かす社会経済活動などの新しい取組が取り入れられた。

2050年ビジョン『自然と共生する社会』

資料：環境省次期生物多様性国家戦略地方説明会より

2030年に向けた目標：ネイチャーポジティブ(自然再興)の実現



生物多様性の保全や持続可能な利用は多様な社会課題と関連しており、“自然保護”の取組を進めるだけでは不十分

2-3 次期戦略の方向性

1 「新たな目標」への対応

現戦略の取組の中心は、**自然環境保全や利活用の推進**であった。

⇒次期戦略では、健全な生態系の維持・再生に向け、気候変動への対応や適切な資源配分としてESG債（グリーンボンド）を発行するなどの社会経済活動といった新たな取組を取り入れる。

2 「戦略」へ既存事業を反映

これまで庁内では、現戦略は**自然保護分野の計画**との意識が強かった。

⇒私たちの暮らしの基礎である生物多様性の保全を推進していくためには、**自然保護の担当部署だけでなく、全庁的に取り組んでいく必要があるため、生物多様性の保全・推進に寄与する既存事業を体系的に取り入れる。**

【多くの取組や主体を巻き込むために】

①「**敷居を低く門戸を広く**」

②「**関係者の裾野を広げていく**」

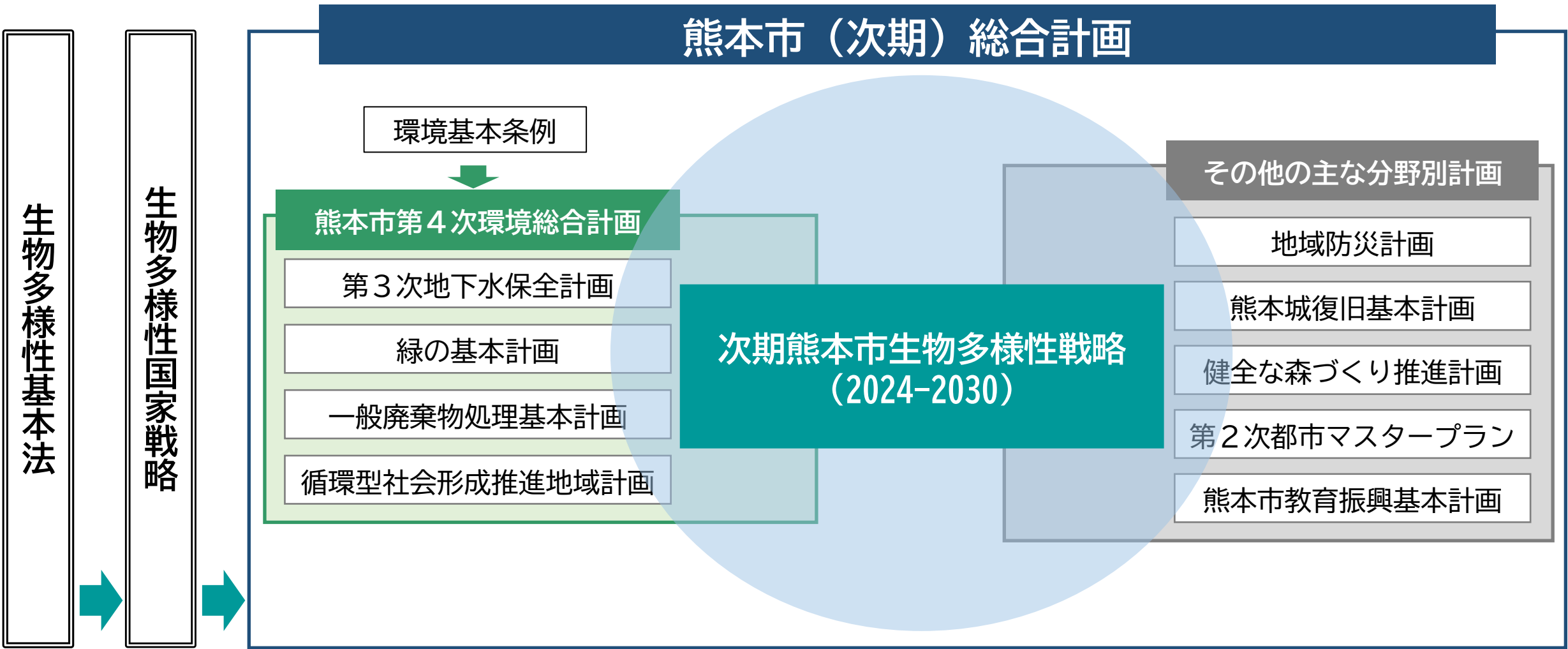
3 分かりやすさの追求

依然として「生物多様性」の認知度が低い状況。

⇒次期戦略では「生物多様性」の重要性を社会に浸透させていたくために、生物多様性が身近なものと密接に関わっていることを、身近な事例で示しながら「**わかりやすく**」伝えていくことで、生物多様性に配慮した市民の行動変容につなげ、社会変革を促していく。

2-4 次期戦略の位置付けと計画期間

生物多様性の保全は私たちの暮らしの基盤であることから、自然環境の分野にとどまらず、その他の様々な分野にも関係する戦略として位置付け、全庁的に取り組んでいく。



3 次期戦略骨子案（基本戦略）

○現行の5つの基本戦略を踏襲しつつ、自然保護分野以外の様々な分野の取組を組み込んでいく。

基本戦略	基本戦略1 ～知る～	基本戦略2 ～学び、つながる～	基本戦略3 ～守る～	基本戦略4 ～創る～	基本戦略5 ～活かす～
2030年までの具体的な取組	●生物多様性に関する情報の収集・発信の体制構築 ●生物多様性に関する情報の整理・分析 ●自然環境に関するモニタリング・調査の実施 ●企業による生物多様性に関する情報開示の推進(TNFD) ●ICTを活用した情報の収集・分析	●生物多様性に関する情報の収集・発信の体制構築 ●生物多様性に関する情報の整理・分析 ●自然環境に関するモニタリング・調査の実施 ●環境に配慮した商品やサービスの周知啓発 ●持続可能な生産・消費のための食品ロス削減 ●持続可能な開発のための教育(ESD)推進	●絶滅危惧種の保全 ●多様な自然環境の保全 ●外来種対策の実施 ●広域的な視点での保全対策の実施 ●気候変動への対応 ●プラスチック対策の推進 ●動物由来感染症対策 ●環境アセスメント制度の構築・実施	●生きものの生息・生育地となる緑地の創出 ●生物多様性に配慮した整備の推進 ●ESG投融資の促進(グリーンbond発行) ●保護地域以外の生物多様性に貢献している場所(OECM)の促進	●生物多様性と地下水、歴史・文化を活かした魅力の発信 ●生物多様性と地下水、歴史・文化を活かした地域づくりの推進 ●生物多様性と地下水を活かした農林水産業の推進 ●民間活力と自然を活用した社会課題解決(NbS) ●熊本地域の文化を活かしたまちづくり ●再生可能エネルギーの推進
	★地下水の地域特性把握	★地下水に関する普及・啓発	★地下水質・量の保全	★地下水かん養	★地下水の活用

★市民や事業者等にとってわかりやすいものとするため、身近で関心の高い「地下水」について、5つの基本戦略全てに明記することで、認知度の向上と生物多様性の保全に向け取り組んでいく。

4 次期戦略骨子案

※朱書き箇所が現戦略からの変更点。

生物多様性の保全には長期的な施策展開が求められるため、現戦略の骨子を踏襲した上で、生物多様性を取り巻く状況の変化を捉え、新たな動きや取組を戦略に組み込んでいく。

現行戦略（骨子）

第1章 目的・位置づけ等

- ・目的、対象期間、対象地域

第2章 策定の背景

- ・生物多様性とは？
- ・生物多様性の危機 ・生物多様性のめぐみ
- ・生物多様性をめぐる世界・日本・熊本市の動き

第3章 熊本市の生物多様性の現状と課題

- ・自然環境の特徴
- ・生物多様性の特徴
- ・みんなで残したい熊本市の自然環境・各区の特徴
- ・課題

第4章 この戦略を通して目指す熊本市の姿

- ・基本理念、望ましい姿（2050年）
- ・短期目標（2023年）

第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画

- ・基本戦略、達成すべき目標、具体的な取組、各主体の基本的な役割

第6章 推進体制・進管理

- ・推進体制、進管理



次期戦略（骨子）

第1章 目的・位置づけ等

- ・目的、**対象期間（2024-2030）**、対象地域

第2章 策定の背景

- ・生物多様性とは？
- ・生物多様性の危機 ・生物多様性のめぐみ
- ・**生物多様性をめぐる世界・日本・熊本市の動き**

第3章 熊本市の生物多様性の現状と課題

- ・自然環境の特徴
- ・生物多様性の特徴
- ・みんなで残したい熊本市の自然環境・各区の特徴
- ・**課題**

第4章 この戦略を通して目指す熊本市の姿

- ・基本理念、望ましい姿（2050年）
- ・**短期目標（2030年）**

第5章 望ましい姿の実現に向けた基本戦略と行動計画

- ・基本戦略、**達成すべき目標**、**具体的な取組**、各主体の基本的な役割

第6章 推進体制・進管理

- ・推進体制、進管理

5 今後のスケジュール

	2023 5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2024 1月	2月	3月	4月	5月
業務	骨子案検討			施策・ 行動計画検討				パブコメ実施		素案 修正	完成		
					素案検討								
議会					R5③ 骨子案 報告			R5④ 素案 報告			R6① パブコ メ 報告		
推進 会議			① 骨子案		② 施策等	③ 素案					④ 報告		R6① R5 評価
専門 家会 合											① 報告		
庁内 会議		① 概要 説明	② 骨子案		③ 施策等	④ 素案					⑤ 報告		